

アニタ・ブルックナーの世界

——孤独な女性の肖像——

鈴木 万里

最近のイギリス小説はかつてないほどに多様な世界を映し出している。それは数多くの非イギリス系の作家たちの活躍に如実に表われていると言えよう。ナイポール、ラシュディ、モウ、イシグロ、バーンズ、ジャブバラなど様々な出自を持つ作家たちが描き出す世界は、マルティ・カルチュラルなイギリス社会を最も雄弁に語るものであろう。中でも、極度に抑制された鋭い感性で、個人の内面的世界を緻密に綴っていくアニタ・ブルックナーの作品は、際立って個性的な印象を与える。彼女はポーランド系ユダヤ人の家庭に生れた美術研究家であるが、1984年に出版してブッカー賞を受賞した *Hotel du Lac* (邦訳名、『秋のホテル』) は、ドラブルの *The Millstone* (1965, 邦訳名、『碾臼』) 以来のベストセラーとなり、日本でも好評をもって迎えられたという。ブルックナーが好んで描くのは、孤独で内向的な独身女性の姿であり、その世界は、例外無く消極的かつ閉鎖的であって、一見するとエネルギーに活躍しつつある現代の女性像からはおよそかけ離れていると感じられるかもしれない。その小説世界は、変化の激しい現代社会を写し取るものではなく、むしろヘンリー・ジェイムスを思わせるような「何かが起こりそうで、結局何も起こらずに終わってしまう。」という、もどかしい日常を延々と綴っていくものである。高揚した感情の吐露やクライマックスと言えるような場面は殆どない。何かが成就するという達成感も皆無である。主人公たちは、常に激しい孤独と疎外感に苛まれ、失望、苦悩、幻滅そして諦観といった負の精神状態から抜け出すことができない。このような自閉的な性格を特徴とする小説が、多くの読者に訴えかけて共感を誘うのは何故であろうか。ひとつにはセンチメンタルに堕することのない抑制の効いた理性的な作品世界の構築と、冷静な自己分析が、混沌とした我々の日常に異質な視点を与えてくれるためであろうか。あるいは、一見自由で華やかで充実した人生を享受しているように見受けられる同世代の女性たちも、実はブルックナーの描く人物たち同様に、癒し難い孤独感と不安を秘めているのかもしれない。本

稿では、1990 年までに出版されている十冊の作品のうち、第 1 作に当たる *A Start in Life* (1981) を対象に、主人公の生き方や価値観を分析し、そこに提示される様々な問題について考察して、ブルックナーの描く世界を検証し、現代に生きる我々の置かれた状況を僅かなりとも把握する手掛かりとした。

A Start in Life (アメリカでは *The Debut* の書名で出版) は、恐らく最も自伝的側面が強く、その後の作品を特徴づけていくあらゆる要素を含んでいる。冒頭の一節は初めて小説という文学の領域に踏み出そうとする作者の書き出しとしては極めてアイロニカルであり、ブルックナーの小説世界に一貫して現われる自己否定的な基調を決定している、という意味で極めて興味深い。

Dr. Weiss, at forty, knew that her life had been ruined by literature.⁽¹⁾

主人公ルース・ヴァイスは、フランス文学、とりわけバルザックの研究家として相当の評価を得、大学で教鞭をとっている。世間的には成功者と見なされる境遇であるにもかかわらず、彼女は深刻な挫折感に苛まれている。それでは、生活の基盤を文学に置いていながら何故「自分の人生が文学によって台無しにされてしまった。」と考えるのであろうか。それは、文学を通して身につけてきたモラルこそが、現実の世界では彼女を常に精神的な敗者としてきたからに他ならない。幼い頃からシンデレラの物語や、ディケンズの小説に魅せられたルースは、善良な主人公はいずれ報われて幸福を手にするはずであるという期待を持たずにはいられない。しかし現実はその実現を許さず、決して満たされることの無い期待感のみが自己増殖していく。実人生に幻滅すると、時間を遡って子供時代に耳にしたシンデレラの心地よい物語に浸ることを夢想する。

In fact she was extreme in her expectations and although those expectations had never been fulfilled she had learnt nothing. When life was particularly uncomfortable she wished that time might be reversed and that she might fall asleep once more to the sound of the most beautiful words a little girl could hear : 'Cinderella shall go to the ball.'⁽²⁾

この期待と現実の乖離は、成長のあらゆる段階においてルースの人生を特徴

づけている。たとえ達成されることが無くても、決して期待し続けることをやめない。それどころか失望と幻滅は、一層大きな期待へと繋っていく。そして将来への過剰な期待は、これまでの生活即ち自分の過去に対する嫌悪として現われる。過去とは、現在の自分を形作ったものであり、より具体的には、家や両親の生き方を含む前半生である。この小説は初めと終りの数ページを除いて殆どが、ルースの子供時代から現在に至るまでの叙述に当てられている。あたかも 40 歳にして既に語るべき人生が終ってしまったかのように。

祖母ルースは堅実なドイツ人で、家政を引受け、息子を愛し、嫁を憎み、孫娘の面倒をみる。父ジョージ（もとゲオルグ）は、稀少本の店を祖父の死後受け継いでいたが、実際には仕事をせず、劇場に出入りし、女優の妻を熱愛している。母ヘレンは、家事も子供の世話も一切手を出さずに、自分の世界だけに執着する。両親は每晚遅く帰り、ルースは祖母とひっそり暮らす。このような変則的な家庭に育ったにもかかわらず、彼女は両親を熱愛して、父母が続けようとしている新婚の雰囲気壊す自分の存在を申し訳なく思う。冷静な祖母は、大人にならず成長もしない息子夫婦が孫に悪影響を及ぼすことに気づいている。やがてルースは、グリムやアンデルセンに続いてディケンズに接すると、モラルの世界を知り、美德は必ず勝利し、忍耐は報われると信じて、夢中になる。祖母の死後、ルースは家族の中で孤立して暮し、やがてフランス文学に熱中する。思春期になっても、大人の世界を予め知っていたし、自分とは縁の無いものだと考えていたので、憧れたりもしない。むしろ大人のイメージは忌むべきものと映っている。

She was in no hurry to enter the adult world, knowing in advance, and she was not wrong, that she was badly equipped for being there. In any event it seemed unattractive and nothing to do with her. Her most persistent image of the adults was that smoky bedroom, untidiness, watchfulness, and over-insistent and over-demonstrated affection.⁽³⁾

彼女の唯一の希望は大学に行って学者になることだった。このように両親にも愛されず、少しも構われない生活の後、大学に通うようになると新たな世界が開けてくる。図書館で 9 時まで勉強でき、自分で服を買ったり、外で食事ができることを初めて知ったルースはなるべく家で過ごす時間を最小限にして、充実した学生生活を始める。図書館で過ごす夕べは無上の喜びを与え

てくれたので、今までにないほど何かに属しているという感覚を味わうことができる。

But in the library she came as close to a sense of belonging as she was ever likely to encounter.....Trained to keep still from earliest childhood, and starved of company, she found the evening hours in the library the most satisfying of her life.⁽⁴⁾

これまで家の中に居場所を持たなかった彼女にとって、逆説的ではあるが、どこかに帰属すると感じるからこそが、自己の解放を意味するのである。やがてルースは自宅の部屋代を払うようになり、過去との距離を置く。更に男友達ができることをきっかけに友人の忠告に従って自宅を出て、屋根裏部屋を借りて引っ越す。地上という現実から最も遠い屋根裏部屋とは、限りなく期待を増幅させるルースに如何にも相応しい場所といえるであろう。やがて奨学金を得てフランスに留学することになっている。彼女は着実に過去の自分と決別して新たな人生を開拓しているように見える。ところが男友達との些細な行き違いがもとで、もう一人暮らしをする必要は無いと考え、再び自宅に戻ってしまい、自ら解放の可能性を封じてしまうのである。あまりに孤独で読書にも集中できず、長い散歩で気を紛らわそうとする。夏休みも耐え難く、これまでは勉強が避難場所となっていたのだが、今では勉強などは他のことをする能力のない者がすることだと否定的にとらえるようになる。

Work, she thought, is a paradox : it is the sort of thing people do out of sheer inability to do anything else. Work is the chosen avocation of those who have no other calls on their time.⁽⁵⁾

やがてルースはパリに留学するが、父の知り合いの老夫婦のもとでのひっそりとした下宿生活は侘しく不自由で、長い散歩と国立図書館での勉強という決まり切った生活を自らに課して、孤独感を一層募らせていく。しかし、ふとしたきっかけから親しく付き合うことになる英国人夫婦は、異なった価値観と生き方を教えてくれ、新たな世界が開ける兆しを見せる。また、図書館で顔を合わせるフランス人の学者はルースに理解を示し、頻繁に会うようになる。ところが、気づまりな下宿を出て、自分の部屋を手に入れ、漸く自分を解放して自由な生活を始めようとした矢先に、母が心臓麻痺の発作を起こしたので、すぐに帰国するようにとの連絡を受ける。ここでも、期待が最高潮に達した瞬間に、事態は急転回し、予想を裏切って苦い失望を残す。結局、

母は亡くなり、父を一人残しておけないルースは、パリに戻ることもできず、大学の職に就き、父親の世話をしながら研究生生活を送ることになる。かつての屋根裏部屋のあった家の一室を再び借りて、時々そこで一人の時間を過ごす、家に戻ると娘に置き去りにされるのではないかと危惧する父親が、出て行った時と同様に窓際で彼女を待っている。母の死によって、ルースはそれまで以上に家に囚われてしまう結果となる。その後、父の希望で、かつての父の店の後継者と結婚し、束の間の平安を得るが、半年後に夫は交通事故で亡くなったことが唐突に語られる。ルースは再び父親と二人の生活に戻る。

このようにルースは何度も家を出て、新たな可能性に期待をかけるのであるが、その度に失望と幻滅を味わう結果となる。あたかも、家から離れようとすればするほど、強い求心的な力が加わって、元の場所に引き戻されてしまうかのようである。これはルースの精神構造と深い相関関係をなしている。彼女が引越しを決める時には、常に対照的な性格の友人たちが関わっている。そして彼らとの接触は、自己解放のきっかけとなり得る数少ない機会を提供してくれる。ところが、それはいつも中途半端な状態で終わってしまう。それでは、彼女が自らの外に出ようとする試みはどのような軌跡を描くのであろうか。

大学に入ってきた友人アンシアは、明朗で気が利いて軽薄で美しく、既に大人の女としてのあらゆる経験を積んでいるという、ルースとは正反対の人物である。母親を早くに亡くして父親に強い執着を持っている点もルースと対照的と言える。ブルックナーの描く主人公は例外無く母系的な影響が極めて強く、ルースも秩序と節制を重んじる祖母の精神的な後継者である。アンシアは服装から生活のスタイルに至るまでルースに様々な忠告をし、二人は内心相手にうんざりしながらも、互いの友情に満足している。ルースは、忠告に従って髪を切るが、ヘア・スタイルを変えたり、新しい服を買ったりする行為は、自己改革の試みとして頻繁に登場し、主人公が異なる価値観の世界へ一步を踏み出そうとしていることを表わす。そして彼女は、廊下で呼び止められフランス留学の奨学金を獲得したお祝いを言ってくれた学生に唐突に恋をする。彼リチャード・ハーストは大学で最も注目を集める美青年で、クリスチャンで、心理療法家としてカウンセラーの仕事で多忙な生活を送っている。ルースが恋に落ちた理由は曖昧で、相手の人間性に惹かれたわけでも、考え方に共感したのでもない。しいて言えば、彼はルースのみならずあらゆる女性の期待を遥かに上回る男性であったということであろう。リン・V. サドラーは「ブルックナーではいつも、女主人公は間違った相手に恋をす

る。」⁽⁶⁾と指摘しているが、まさにルースは自分の期待に恋をしたと言えるであろう。そして相手に相応しいほど自分が美しくないことを苦にする。ブルックナーの主人公たちは、概して人並み以上に美人なのであるが、例外無くそのことに気づいていないか、あるいは根拠の無い劣等感に悩まされている。これも自分自身に対する期待が過剰であるがゆえに起こる現実認識の欠如と言えよう。ルースはリチャードを夕食に呼びたいと思うが、自宅の古風で乱雑な食堂に招待するのは忍びないので、アンシアの忠告に従って、屋根裏部屋を借りて引っ越すことにする。

ブルックナーの小説世界では、女性が男性に食事を供することは、特別の意味を持っている。それはまるで女性が幸福になる唯一の手段であるかのようであり、男性に食事を作ること、あるいは奢ることに、強い執着と満足を示す女性たちが数多く登場する。「食べる」という行為と性行為の心理的および象徴的相関関係を考えれば、ごく平凡な代償行為と受け取られかねないが、ブルックナーの場合は、奇妙なことに代償ではなく、むしろ男性に食べさせることこそが、女性の究極的な念願であるようにさえ見受けられる。男性に食事を作ってあげられる女性は幸福であり、そうでない女性は決して幸福にはなれない。不幸な女性は一人でそそくさと食事をする。逆に、女性に食事を作ってもらえない男性は満たされずその関係はいずれ破綻する。例えばルースの父ジョージは妻が全く食事を作らないので、外に愛人を持つが、その関係は毎日夕食を共にするだけに留まっている。やがて彼は妻をもはや愛してはいないことに気づき、夕食を作ってくれる愛人との結婚を考えるまでに至るのである。このような特殊な男女関係はブルックナーの世界を把握する上で本質的な問題となり得るに違いない。これについては、後に考察する。

従って、ルースがリチャードを夕食に呼ぶ計画を立てたのは、幸福を賭けた初めての重要な試みであった。だからこそ、わざわざ引越して、図書館で料理法を研究し、当日は講義を休んでまで準備に念を入れるのである。その日の朝、彼女は不安と期待で高揚した気分で目覚める。

Ruth woke at her habitual early hour of six and wondered how she was going to fill the day. With anticipation naturally. That is how most women in love fill their day. Frequently the event anticipated turns out to be quite dull compared with the mood that preceded it. The onus for redeeming the situation rests on the other person who is, of course, in no position to know of the

preceding mood. Thus both fail and both are disappointed.⁽⁷⁾

ここでもまた現実ハルースの期待には到底追いつかず、二人とも失望せざるを得ないことが予め示される。しかも、彼女はもし今夜がうまくいかなければ、将来何かが起こるきっかけを失ってしまうと思いつめる。

Here she reached the heart of her curious distress, for if this evening did not turn out well, did not produce some indication of future progress, did not in fact elicit some sort of plan from Richard, she was devoid of resource for making anything happen to them both in the future.⁽⁸⁾

結局、カウンセラーの仕事で手間取って、1時間半遅れてリチャードが現われた時には、ルースは気分が悪く、せっかくの料理は台無しになってしまい、もう取り返しがつかないので、早く一人になりたいと思う。明らかにリチャードの方はこの夕食をそれほど重要なこととは考えていなかったのである。このアンティ・クライマックスの後、彼女は諦めて自宅に戻ってしまう。もともとリチャードを評価していなかったアンシアは、彼が約束に遅れたことに呆れ、更にルースが自宅に戻ったと聞いて、激怒する。理性的で慎重なルースがいつも現実を把握できずに失望を繰り返すのに対して、この友人は常に的確な状況判断をするのであるが、残念ながらルースの自己解放に役立つほどには影響力を持たない。ずっと後、老いた父の世話をしながらひっそりと暮すルースを見た時に、適切な忠告と警告を与えて、彼女のために泣いてくれるのもアンシアなのである。

In the hall Anthea hissed, 'For God's sake, get out before he's bedridden. Find a housekeeper. Do *something*. Have you any idea what you look like? What about the flat in Paris? Is it still there? Have you got a lease? ……'

'I can't go back,' she replied. 'I've got to stay here. I can't leave him. Besides, I've got a job. Professor Wyatt has offered me an assistant lectureship. I'm very lucky really.'

They looked at each other. Anthea's eyes filled with tears.⁽⁹⁾

フランス留学は、新たな可能性を期待させるが、パリでの下宿は父の友人の老夫婦の家で、自宅の延長に過ぎない。ルースの侘しく孤独な暮らしは、夢の形で語られる。——彼女は白い部屋で寒さに凍えながら、試験の結果を

待っている。他の部屋は暖かく、他の人々は既に良い知らせを受け取っている。やがてブリュセルに移り、非常な飢えに襲われて、連れには目もくれずに、パンとコーヒーを大急ぎで食べる。連れは立ち去る。——寒さ、不安、飢え、そして孤独、このようなあらゆる不幸を凝縮したような生活の中で、ルースは、ルーブルで見かけた如何にも幸せそうな若い英国人夫妻ヒューとジル・ディクソンに強く引きつけられる。二人が夕食を何処で取ろうかと相談しているのを耳にして、彼女は現在の生活の耐え難い侘しさと不毛さを実感する。ここでも「食事」が幸福の主要な判断基準となっていることに注目したい。毎日決まりきった生活を繰り返す囚人のような我身に募る孤独感に引き比べ、如何にも幸福そうな二人はまるで未知の種族のように映ったのである。

She heard them discussing where to eat that evening and a great pain filled her, that she should never be able to make such plans. The impossibility of her present life was apparent to her as it had never been before. She was a prisoner in her cell, and in addition to her physical restraints she had imprisoned herself in a routine as destructive of liberty and impulse as if it had been imposed on her by a police state. Every morning she caught the same bus to the Bibliothèque Nationale. Every evening she presented herself for her bath and returned, chilly, to her room where, she was beginning to realize, problems of increased loneliness awaited her. She studied the couple closely, as if they were an unknown species. They were, in fact, an unknown species. They were happy.⁽¹⁰⁾

この時、自分を変えたいという大きな欲求と、どのようにすればよいのかという不安に襲われる。状況が変わらない限り、その可能性を閉じ込めてしまうかもしれない。愛は可能にしてくれるかもしれないが、彼女が愛せそうな人などいないし、誰も彼女を見てくれさえしないと考えてぞっとする。

A great desire for change came over Ruth and a great uncertainty as to how this might be brought about. For she knew, obscurely, that she had capacities as yet untried but that they might be for ever walled up unless her circumstances changed.

Love, she supposed, might do it, but there was no one with whom she might fall in love. Nobody even looked at her,⁽¹¹⁾

ここで特徴的なのは、自分を変える手段を他に求めていることである。逆に辿れば、誰かが自分を見てくれさえすれば、あるいは誰か愛せそうな人が現れさえすれば、状況が変わって、現在の自分から脱却できるに違いないという論理になる。彼女がいつも陥る過剰な期待も実はこのような発想によるものであり、現実が追いつかないほどの期待を抱くがゆえに、大きな失望を味わう結果となるのだが、ルースはそのことに気づいてはいない。偶然知りあったディクソン夫妻と意気投合したルースは、その晩二人を夕食に誘う。賑やかなレストランで旺盛な食欲を見せる二人と一緒にいて、彼女は安らぎを覚え、その夜は夢を見ずに眠る。この場面でも食事を供することが心の平安に直接繋るのである。リチャードとの夕食の失敗以来、自分の外見に殆ど注意を払っていなかったルースは、ヒューの勧めに従って、髪を短く切り、重いコートをやめて新しい服や靴などを買い揃える。彼らはいわば第二のアンシアとしてルースの閉ざされた世界に新たな風を送り込む役割を担っていると言えよう。彼女は、時間に余裕のある仕事をもつヒューと頻繁に出歩くようになり、二人を夕食や日曜の昼食に誘って、充実した日々を送る。図書館には以前ほどきちんと通わなくなる。そして、彼女は今まで頑なにこだわってきたモラルの世界は間違っている、この世は美徳によって得られるのではない、ということに気づかされるのである。

Her insights improved. She perceived that most tales of morality were wrong, that even Charles Dickens was wrong, and that the world is not won by virtue. Eternal life, perhaps—but who knows about that? Not the world. If the moral code she had learnt, through the literature she was now beginning to reinterpret, were correct, she should surely have flourished in her heavy unbecoming coat, in her laborious solitude, with her notes and the daily bus ride and the healthful lonely walks. Yet here she was, looking really not too bad, having spent more than half her money, eating and drinking better than she had ever done in her life, and absconding from the Bibliothèque Nationale to spend time with another woman's husband.⁽¹²⁾

ここで彼女は様々なことを考えさせられる。今まで誰も教えてくれなかった、規制に反抗する心地良さを初めて味わい、問題なのは、あることをすべきかすべきでないか、ではなく、自分がしたいかしたくないか、ということなのだと言ったのである。

She had much to think about ; that was what was so agreeable about kicking over the traces. That was what they did not tell you. It was no longer a question of whether she should or should not do such and such a thing but whether she would or would not.⁽¹³⁾

しかしその認識は、むしろルースを悲しませる。本の世界を正しいと信じていられる方が遥かに望ましかったし、美德を求めての忍耐強い努力、長い試練、目標を達成した時の喜びなどこれまで尊重してきたものに価値を見出していたかったのである。

Yet she was aware of something out of joint. She would have preferred the books to have been right. The patient striving for virtue, the long term of trial, the ecstasy of earned reward : these things would never now be hers. She had deviated from the only path she knew and she had lost her understanding of the world before the fall. That there had been a fall, she was quite sure. She had only to look at her glowing self to be assured of that. And selfishness and greed and bad faith and extravagance had made her into this semblance of a confident and attractive woman, had performed the miracle of forcing her to grow up and deal competently with the world. People seemed to like her more this way. The concierge waved from his window to her, night and morning. There was indeed much to think about.⁽¹⁴⁾

身勝手、貪欲、不信心、浪費などの悪徳を身につけることによって、漸く世間で通用するような魅力的で自信に溢れた女性へと成長し、人に好感を持たれるようになったとは、如何にも皮肉な結果である。新しい世界に足を踏み入れて目覚ましい変身を遂げたルースはクリスマスが近づいても家に帰る気にはなれず、様々な口実を設けてパリに留まることにする。家が体現している今までの自分から脱却することによって、過去と決別し、初めて手にした

人生の喜びに思う存分浸ることを望んだに違いない。

She would stay here, no doubt invite Hugh and Jill out for a tremendous meal, or even walk silently by herself. She was quite happy to do so.⁽¹⁵⁾

ここで、ルースが楽しみにしているのが、ディクソン夫妻に御馳走することと共に、一人で散歩することとなっている点が興味深い。この一見正反対の行為に彼女の本質が顕著に表われている。人生の快樂に激しく憧れる一方で、孤独と内省を志向する極めて強い自己抑制が働くという二面性がルースの内的世界を特徴づけており、その絶えざる相克が常に彼女を分裂、苦悩させているのである。そして、ここでつかの間の幸福と充実感に酔ったとはいえ、やはりルースはやがて元の世界に帰っていくことになる。そのことが、現実生活の幸福とはもはや相容れない関係にあることを了解した上で、そして敗者となることを覚悟しつつ、彼女は規範と秩序の世界を選び取るのである。

ディクソン夫妻によって人生の喜びに開眼したルースは、その世界の延長線上にあるもう一人の重要な人物に図書館で出会う。それは以前ヒューに連れられて講演を聞きに行ったことのある高名な学者、デュプレシス教授である。彼はずっと年長で妻子もあるが、文学という同じ領域に属し、ルースを最も理解し得た男性として描かれている。図書館で言葉をかわす機会があって、帰りがけに一緒にコーヒーを飲み、その後週末以外は毎日会うことになる。彼はルースに今まで誰もしなかったほど数多くの質問をする。これまで自分を見てくれる人などいないと諦めていた彼女にとって、関心を示され、様々なことを聞いてもらえるという体験はさぞ新鮮で心地よいものであったに違いない。恐らく教授は、自分について語らせることで、ルースを強い自己抑制から解放させる意図であっただろう。彼は他にも多くを与え、彼女を下宿から連れ出しては楽しませてくれるが、ある時、夕食に出掛けて、ルースは父方から禁じられていたロブスターを初めて食べる。ここでは、これまでの「食事」のパターンが逆になり、ルースが食事を供されることになる。しかも、それは家の禁忌を初めて犯すという後ろめたい喜びを伴った心ときめく挑戦であったことであろう。しかし、人に甘えることに全く不慣れなルースは、心から安心して好意を受け入れることができない。

‘What can I give you,’ she asked him, ‘when you give me so much?’

‘First you must learn to take,’ he answered. And he continued to give.⁽¹⁶⁾

「まず受け取ることを学ばなければ。」という言葉は、ルースに最も欠けている部分を的確に指摘している。外界との違和感に悩まされ続けてきたために、必要以上に慎重で自己充足的な傾向を強めてしまった彼女にとって、何かを受け入れることは、これまでの価値観を覆す危険に繋りかねないのである。しかしデュプレシス教授との奇妙な交際によって徐々に幸福に慣れてきたルースは、図書館やカフェで会うだけの関係に苛立ちを覚えるようになっていく。

If only she could sit with him in a room, quietly, talking. If only she could wait for him in some place of her own, hear his footsteps approaching. If she could cook for him, make him comfortable, make him laugh. More than that, she knew, she could not expect. Can anyone?⁽¹⁷⁾

ルースの望みは、教授の訪れを待つて料理を作りもてなすことという極めて具体的で単純なことである。そしてその希望はディクソン夫妻が帰国することになり、二人のフラットを譲ってもらうことで、一気に実現の可能性を帯びてくる。彼女はまるで手に入れ損なった幸福を取り戻そうとするかのよう、期待を込めてあれこれ考えを巡らせる。

Plates, she thought, knives and forks ; find the nearest butcher. I will learn to cook, better this time.⁽¹⁸⁾

更に彼女は、将来自分一人で研究していくことは可能であるし、それこそ最も相応しい唯一の道であるとはわかっていたが、それ以上のことを許されないものであろうかと考えるようになる。バルザックに教えられたように、善良な敗者になるよりも邪悪な勝利者になる方がよいと思う。

She knew that she was capable of being alone and doing her work—that that might in fact be her true path in life, or perhaps the one for which she was best fitted—but was she not allowed to have a little more?.....Better a bad winner than a good loser. Balzac had taught her that too.⁽¹⁹⁾

にもかかわらず、彼女は結局「善良な敗者」の道を選び、お気に入りの女主

人公ウージェニ・グランデ——不誠実な従兄の言葉を信じ待ち続けて、無残に裏切られてもなお彼を助ける善良で強靱な女性——にも通じるような自己抑制の人生を選ぶことになるのである。

一方、漸く侘しい下宿から解放され、自分の自由になる家を手にして、引越しの準備に夢中になるルースを見て、教授は不安に駆られる。

She was taking it all so seriously that he feared for her. No one could measure up to her expectations ; no one would care to try. He himself would be forced to abdicate at some point. But not yet.⁽²⁰⁾

今回も、誰も彼女の期待には叶わないこと、現実には遠く及ばないことが、予め示される。新居を整え、教授を招いて、ワインと手作りのケーキでくつろいでいる時、英国から母の急を知らせる電話があり、再び両親の家に呼び戻されてしまう。慌ただしい出発間際に、一度も使うことのなかったきれいなシーツを思い浮かべる場面は、彼女の失望と諦めを何よりも如実に語っている。

このように、ルースは何度も自己解放を試みてはいるのだが、その度に失敗して元の自分に戻ってしまうことを繰り返している。何故であろうか。まず、彼女の期待が現実を遥かに追い越してしまうほど大きいことが、一因として考えられよう。期待すればするほど叶えられなかった時の幻滅は深刻なものとなる。この点については、これまでも度々指摘してきた。しかしより大きな原因は、自分が囚われていてそこからの解放を願っている価値観に彼女自身が強く執着しているということである。いわば、自分を束縛しているものを手段として、その束縛から逃れようとする自己矛盾のために、解放は阻止されているのである。それではルースが拘り続けた価値観とは如何なるものであったのだろうか。それを解く手掛かりが、頻出する「食事」のイメージにある。そこで次に「食事」は何を表わしているのか、ルースは何故、「食事」に固執したのかを検証してみることとする。

最初に、食事を供する人物として登場するのは、ルースの祖母ヴァイス夫人である。彼女は恐らく亡命して、後に夫を失った不幸な過去を持つ女性であり、ベルリンから運んだ重厚な家具と食器を備え付けた食堂に君臨し、息子と孫娘のためにきちんと食事を作る、一家の中心として機能している。食物を与え、養う者という意味で彼女は典型的な母性を体現している。しかし、一方で、喪服をまとい、昼間に眠り、息子を奪った嫁を憎むという魔女めい

たテリブル・マザーの側面も見逃すことはできない。彼女は大勢の息子やその嫁たちが集う食卓を取りしめることに憧れていたが、現実には朝食を息子と共にし、昼食、お茶、夕食を孫と共に取るという侘しい食卓である。一方、ルースの母のヘレンは、対照的に、料理も育児も放棄して、女優としての経歴と自分の幸福のみに執着し、客間で無為に過ごす反母性的な人物として描かれる。痩せていて赤毛で短髪という容貌を持ち、夜遅く帰宅するか、あるいは客間で横たわっているというヘレンもまた、祖母とは別の意味で魔女的な要素を備えている。興味深いことに、家の中で祖母は食堂、母は客間と各々居場所を持っているのに対して、父の領域は無いのである。あたかもこの二人の対照的な女たちの破壊的なエネルギーが父を家から抹殺してしまったかのように。だからこそ父は当初から外に愛人を持って、そこで食事することに安らぎを覚えるのである。祖母の価値観とは、伝統的な家族制度に基づく考え方であり、母のそれは、規範の失われた現代における、より自由な、個人の幸福追求を許容する生き方である。この新旧対立する価値観が同居し微妙なバランスを保っている家にルースは生れ育ったのであり、この家は彼女の精神構造を象徴的に表わしていると言えるであろう。即ち、秩序と節制を重んじる堅実な祖母の持つ忍耐と、我身の充足と過去にばかり囚われている母の夢と幻滅を受け継ぐことになるのである。

従って、祖母が亡くなった時、ルースが夕食の準備をしたことは、この家の崩れた均衡を立て直すために、祖母の精神的な後継者となろうとする彼女の意志を示していると考えられよう。その後雇われた家政婦マギーは、母に取り入って家事の手を抜く怠惰な女性であったために、祖母の役割を担う存在とはなり得ない。ルースは、退廃的な家の雰囲気を超然とし、両親や家政婦が好む高級な料理を避けて、質素な食事を一人で準備し、台所で食べるようになる。

She made herself eggs and boiled potatoes and salads, but this spinsterish fare did not sit well on the dining room table, was not worthy of the solemn oils and her grandmother's chair, so she took to eating in the kitchen.⁽²¹⁾

ここで、食堂が使われることなく、空いているということは、ルースが自分を「祖母の椅子」に相応しい存在ではないと感じており、この家の精神的な均衡が崩れていることを示している。従って、この後ルースは、無意識のうちに何とかこの空白を埋めようという一種の脅迫観念に囚われることにな

る。最初の引越しの動機は、リチャードに食事を御馳走するために、家の食堂が暗く古風で相応しくないと考えたからであった。パリの下宿では自分で料理することもできずに、ルースは不幸であった。やがてディクソン夫妻と知り合い、二人に外で御馳走するようになって漸く自分の存在を実感することができるようになる。やがて夫妻のフラットに移ることになり、これで教授を招いて御馳走できると心をときめかせる。このようにルースの足跡を追ってみると、彼女が如何に「食物を与える者」としての役割に執着しているかが明らかとなる。それは、祖母のルースがかつて家の中で果たしてきた機能であり、祖母の死後、失われてしまった規範を象徴的に表わすものである。そして、伝統的な家族関係に基づく、秩序ある世界を中心とした価値観と言いかえることができる。孫のルースは、祖母が体現していた堅実な価値観を何とか復元しようと試みるが、一度失ったものを取り戻すことはできない。それに代わって、母のヘレンが実践しているような、家族という枠に囚われない、無責任で放埒で感覚的な生き方が、家を支配するようになる。しかし、ヘレンも決して充実した人生を送ることができたわけではない。次第に女優としての仕事が無くなり、老いを感じて過去ばかりに執着し、一日中ベッドに横たわって、自分の伝記執筆のための材料を家政婦と際限なく議論するが、結局一行たりとも書くことなく、夫に見放されているのにも長い間気づかずに、タクシーの中で死んでいく。自由な生き方を代償にして、あまりに大きな犠牲を払ったのではないかと考えさせられる哀れな一生である。ルースは、自由な生活に憧れと期待を抱いてはいたが、賢明にもその巧妙な落とし穴に気づいていた。だからこそ、ディクソン夫妻によって、別の生き方の可能性を知らされ、問題は「あることを、すべきかすべきでないか」ではなく、「自分が、したいかそうでないか」⁽¹³⁾なのであると教えられても、疑問を持つのである。ここでは倫理的な問題が、単に嗜好のレベルへとすり替えられ、回避されている。その危険を敏感に察知したために、やがてルースは、家に戻って、父と共に慎ましく暮す生活を選び取るのである。後日、友人のアンシアや、かつての家政婦が訪ねてきて、ルースに同情し、年老いた父親を施設に入れるようにと忠告しても、彼女は少しも動じない。最後の場面近くで、ルースは牛肉のシチューを作っている。恐らく、父が結婚する以前に、祖母と営んでいたであろう生活が再現されている。食堂は再び、その機能を果たすようになったに違いない。この家は、再び祖母の支配する領域になったのである。ルースは、研究書を出版してくれる編集者ネッドを、半年に一度夕食に招く。彼女は、かつて期待した形態ではないにしろ、「食物を与える者」と

しての役割を果たしている。しかし、母から受け継いだ自由な生き方への志向をも合わせ持つルースは、この家だけでは精神の均衡が保てないために、かつての下宿の一部屋を借りて、そこで週に二日を過ごす生活に落ち着くのである。

このようにルースは、伝統的な価値観を重んじる気質と、家族という束縛から逃れて自由な生活に自らを解き放ちたいという願望との間を揺れ動き、微妙なバランスを保ちながらも、最終的には、時代の趨勢に逆らうことを承知で、前者を選択する。彼女が何度か家を出て、新たな生活を試みたのは、一つには家族としての義務から解放されて自由で独立した生を目指したからであり、また、もう一つの理由は、家の中で失われてしまった家族の中核としての祖母の役割を別の形で回復しようと無意識のうちに努めていたからと考えられる。いわば、家族を拒絶しつつも家族を再構築しようとする矛盾した願望ゆえに、ルースの自己解放は、自分を束縛しているものを手段としてその束縛から逃れようとする逆説的な試みとなる結果に終わったのである。

更に興味深いことは、ルースが新たな生活へと踏み出し、そこに誰かを招いて食事を供し、擬似的な家族を演出しようとする場合、その相手として選ばれるのが、本当の家族となり得る可能性の極めて低い男性ばかりであるという点である。リチャードは、クリスチャンで心理療法家としての仕事に夢中で、ルースとは全く共感する部分を持ち得ない人物であった。ヒューは結婚したばかり、デュプレシス教授は、二十年連れ添った妻と成人した二人の娘を持ち、いずれも決して家庭に深刻な不満を持っているわけではない。ネッドについては殆ど語られないが、彼女が執筆中の研究書にあまり関心を示さないことから判断すると、それほどルースの人生に深く関わってくる人物とも考えられない。むしろ、彼女が常に「間違った男性」を選ぶのは、潜在的に他者との濃密な関係を拒絶しているためなのではなかろうか。デュプレシス教授はルースが引越しの計画に夢中になっている姿を見て、誰も彼女の期待に叶うものはいないであろう、自分もいずれ放棄せざるを得ないに違いないと予測する。ルースの期待は常に現実の枠を遥かに越えてしまうために、相手を置き去りにしてしまうのだが、本人はそのことに全く気づいてはいない。彼女は教授のために新居を整えているのだと反論するが、転居翌朝の充実感、誰にも煩わされることの無い自己完結的な世界の達成に心から満足していることを窺わせる。

But in the morning she eased her aching back against the pillow

and realized that for the first time in her life she would shortly be drinking coffee from her own cup. No more kitchen china. No more landlords' rejects. She was a householder at last.⁽²²⁾

漸く自分の家という安全な避難所を手に入れたルースは、無意識のうちに他者を排除してただ一人で充足する空間を作り出そうとしていることに思い至らない。彼女は人生において激しく求めているものが、決して到達不可能であることを恐らく知っている。むしろ、手に入らないからこそ、求める価値があるのであり、それを限りなく求め続けるために、実現が可能にならないような相手を敢えて選んでいるとすら考えられる。従って、彼女の夫となるロディは殆ど視野に入ってくることの無かった男性であり、むしろ父親が選んだと言えるような経過を経て、たいした感情も無く唐突に結婚に至る。結婚後もそのまま父の家に留まり、更に唐突に半年後夫が事故死したことが、淡々と語られる。かつてのリチャードやデュプレシス教授のために食事を作ろうとした時の期待や高揚感は、ロディに対しては少しも認められない。恐らくこの結婚は彼女の閉鎖的な世界を攪乱する恐れが無かったからこそ実現したのである。彼女が求めているのは、幼い頃から親しんでいた物語や文学に現れる “They lived happily ever after.” という結末であるに違いない。そこでは、善良な主人公が、相応しい伴侶を得て一生幸福に暮す、という調和的な世界が描かれる。美德は報われ、人間同士の愛や信頼は変わることなく、秩序が永久に保たれる。しかし、現実の世界では善良さはむしろ人を退屈させる。美德は、奔放な魅力の前では色褪せて見える。善良で内気で非利己的な人間は、幸福にはなれない。ルースは、学問や仕事の領域であげている着実な成果とは裏腹に、精神生活における自らの敗北を自明のこととして受け入れている。常に激しい孤独感と焦燥に苛まれながらも、その耐え難い状況の中で際限なく思考し、しかもその状況に縛られたままでいることによって、自らを罰しているのである。

ルースの姿を通して浮かび上がってくるのは、他者のいない空間で、自分を呪縛することによってしか存在形態が保てない現代人のあり方である。かつては、家族を中心とした価値観に基づく規範が、各々の生き方を規定しつつも、意味を付与していた。ブルックナーの小説では、親あるいは祖母といった、規範を体現するような家族の死が頻繁に描かれる。その後、残された人々は因習的な束縛から解放され、自由な生き方を選択することが許されるようになるが、同時に家族という最も身近な人間関係の中での相対的な存在

意義を失って、自己という薔薇色の牢獄に閉じ込められる結果となる。主人公は、優れた知性や能力にも恵まれ、高い教育を受け、充実した仕事を持ち、経済的にも余裕のある立場にある。誰に頼る必要も無く、独力で人生を完結することが可能である。自分の世界の中ではすべてが可能であり、期待が限りなく自己増殖していく。そこには、他者の入り込む空間は無い。しかし一方で、自己の世界に充足すればするほど、激しい孤独感が募り、何とかして自分を現状から解放したい、他者との関わりを持ちたい、と考えるようになる。それがルースの場合には、男性を自分の部屋に招いて食事を供するという形をとって表われている。これは、自分の閉鎖的な世界に他者を招き入れようとする試みである。また、かつての祖母が家の中で果たしていた役割を演じることによって、自己という個室に閉じこもってしまう以前の間人間関係を回復したいという無意識の願望でもあるに違いない。ところが、他者を許容しない世界に住む人間にとっては、もはや失望あるいは断念という形でしか他者との関わりを持てないのである。ルースは初めからそのことに気づいている。だからこそ、可能性のない男性ばかりを選び続ける。そして最終的な彼女の選択は、父親といういわば自己の分身であった。誰も自分から逃れる術は無い。如何に重い負担であっても、避けることのできない自分という存在を受け入れ、見据えることこそ、唯一残された生き方であるに違いない。小説の最後で、ルースは編集者のネッドに手紙を書いて、夕食に招いている。彼女は、今後も変わることなく自己という呪縛に囚われつつ、他者を求め続けることであろう。もし「成長する」ことが、人生において実現不可能なことを次々と諦め、変わっていくことを意味するならば、ブルックナーの主人公たちは決して成長しない。彼女らはいつもいわば薔薇色の虚無の中に住んでいる。それは自由という幻想を追いかけた末に、現代人が迷い込んでしまった袋小路でもある。もし何不自由の無い生活と自由とに恵まれた、知的で誠実で善良な人間の行き着く先にあるのが、孤独と虚無だけであるとすれば、一体我々は何をめざして生きることができるのか、という難問をブルックナーの主人公は我々に突きつけている。同時に、自己を実現することによって、結果的に自己に囚われてしまう、アンビヴァレントな人間存在の実態を、冷静に描き出しているのである。

注)

- (1) Anita Brookner, *A Start in Life* (Triad Grafton) p. 1, ll. 1-2.
- (2) *Ibid.*, p. 8, ll. 19-25.
- (3) *Ibid.*, p. 22, ll. 4-10.
- (4) *Ibid.*, p. 28, l. 29-p. 29, l. 1, p. 29, ll. 6-8.
- (5) *Ibid.*, p. 67, ll. 18-21.
- (6) Lynn Veach Sadler, *Anita Brookner* (Twyne, 1990) p. 21, ll. 27-28.
- (7) Anita Brookner, *op. cit.*, p. 45, ll. 25-32.
- (8) *Ibid.*, p. 51, ll. 8-12.
- (9) *Ibid.*, p. 169, l. 30-p. 170, l. 9.
- (10) *Ibid.*, p. 94, ll. 18-32.
- (11) *Ibid.*, p. 94, l. 36-p. 95, l. 6.
- (12) *Ibid.*, p. 99, l. 26-p. 100, l. 3.
- (13) *Ibid.*, p. 100, ll. 7-11.
- (14) *Ibid.*, p. 100, ll. 11-25.
- (15) *Ibid.*, p. 101, ll. 20-22.
- (16) *Ibid.*, p. 104, ll. 27-30.
- (17) *Ibid.*, p. 130, ll. 1-5.
- (18) *Ibid.*, p. 135, ll. 27-29.
- (19) *Ibid.*, p. 136, ll. 9-12, ll. 28-29.
- (20) *Ibid.*, p. 137, ll. 12-16.
- (21) *Ibid.*, p. 20, ll. 11-15.
- (22) *Ibid.*, p. 138, l. 35-p. 139, l. 3.